春色

東道乃楊柳

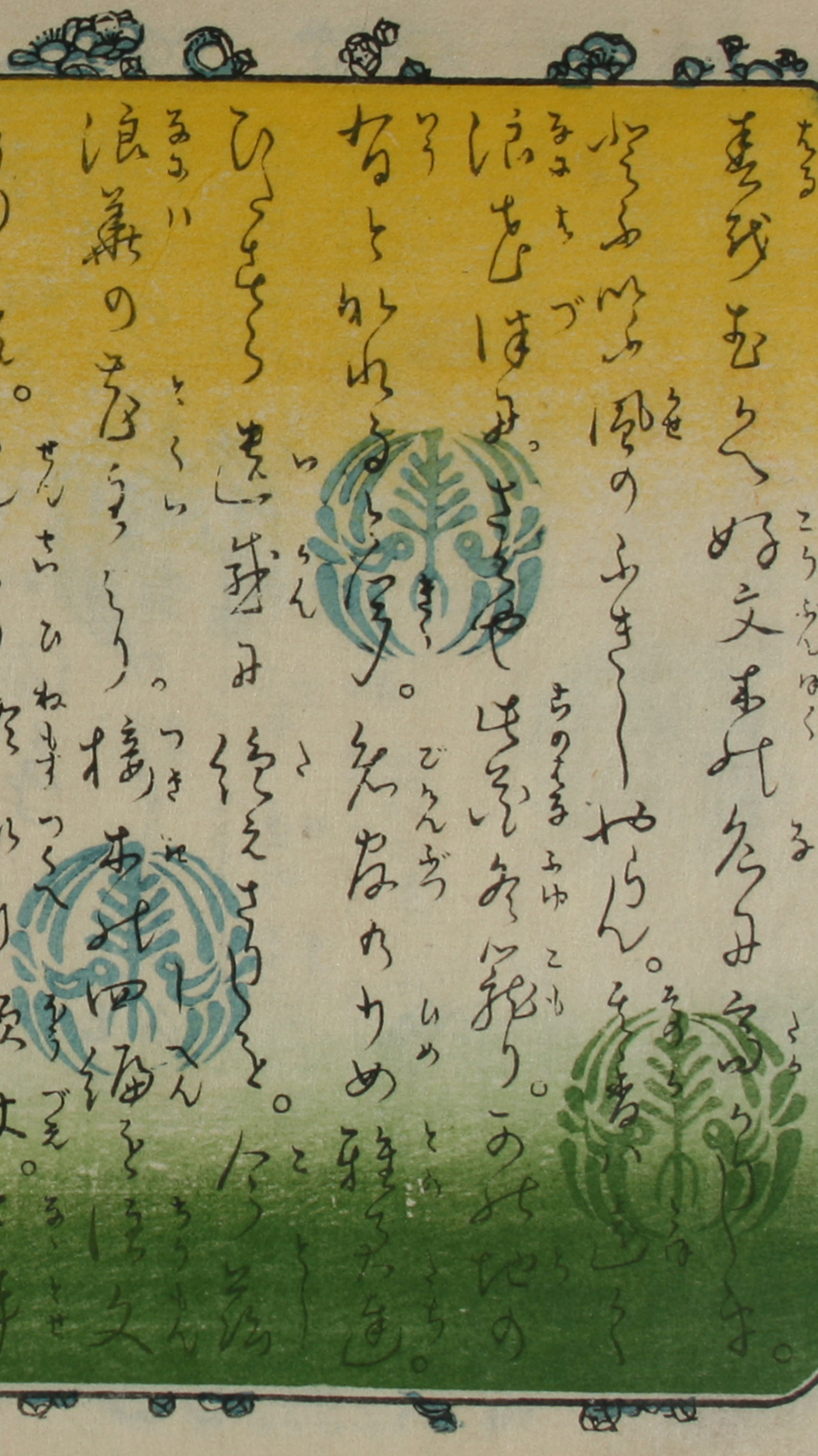
編

和門
文文部
人 3d 號
五 册
4

國語
4L
124

昭和12年

国語



ささ
なのふみ
ろろろろ
ろろろろ
あはれ
あの連
れんぞ
ささげ
しよ
まろ
ろろろ
ろろろ
ろろ

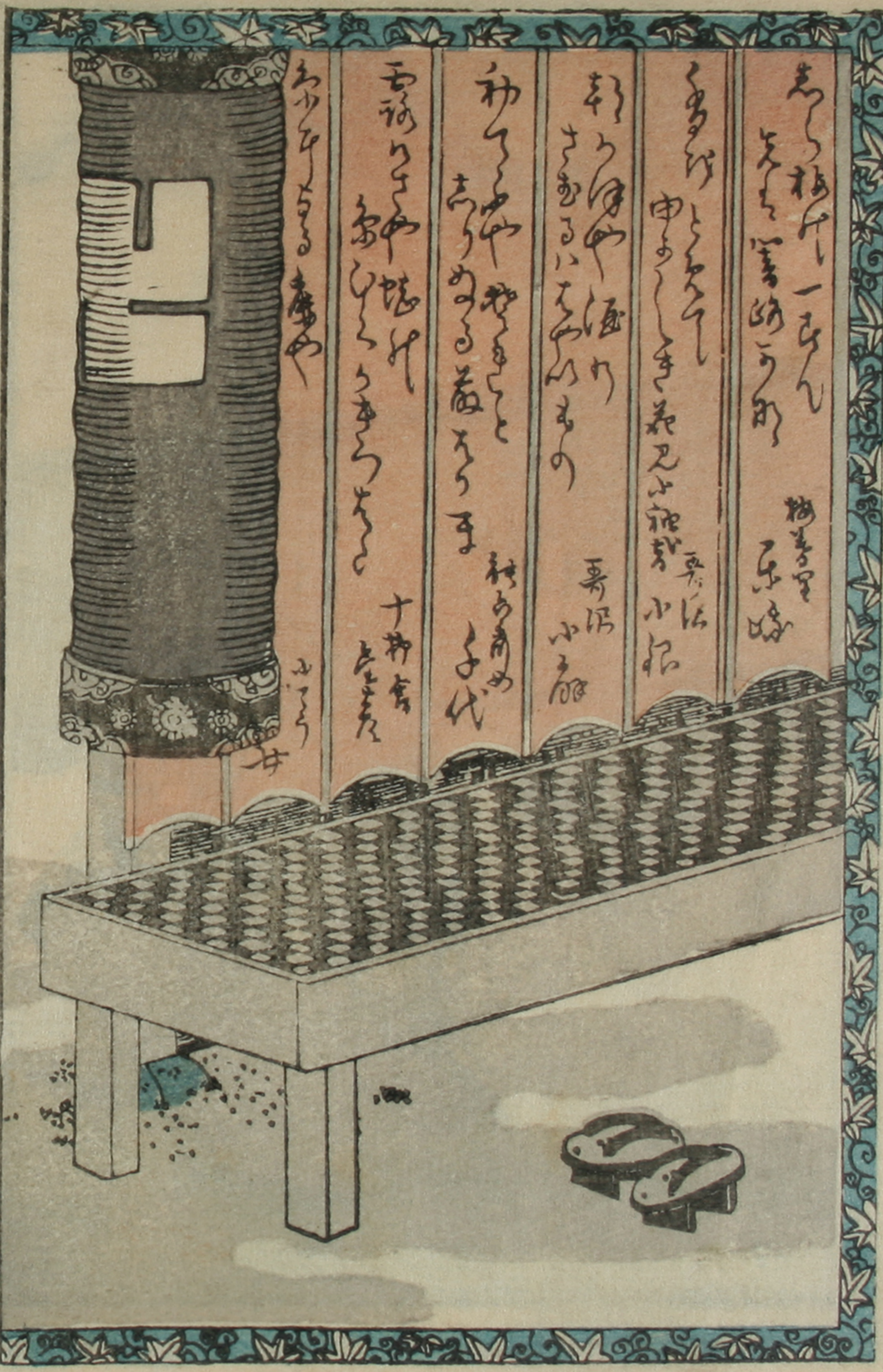

本編
芳鳥女画圖




再出
由之助


舎源氏の中将見立て
お松の侍女
朝ぼらけ


屋次郎が
母の仕
おとよ待ぞ



春色連理梅巻の十

第十九齣　梅暮里谷峩作

江戸

大行の路能車を摧く。若人の心ぉけぶまじ。東
あり。巫峡の水能舟を覆へす。若人の心ぉけぶまじ。これ安
流あり。人の心の好悪ハ常あらまじと。唐土
の老の寛児が。古いえ言葉ぉもぃ合ぃ枚ぉ
う。潮ぉ見ぉまぬ人ぉ心暗ぃ者の寛ぉ

川の閘を開かば、妻も泳ぎ心地や覚ゆらん。

扇屋にて第一の花情紀ノ何がしの君のおわします。想ひ侘えて

新造一人を招ぎ寄せ、第一の花魁を呼ばせ、

て、揚を乞ふ。

金多ければ、迎えもこれ有り。

毎に毎に連て来たりしが、

第一、其の名を問へば、

でお宝の良を目前に有難く妹
再時丹治を扶助て呉ー。その恩人を思ひさや。ぱ家
由え即ち。もろもろ宝の兄ありて。
思うれを思へ。実理のまま
槇と名乗て。
のそ。
由え即ち。
座蒲団の上へ座りぐ

貳分無しと焼杉おてぷら小蕪物の香の
共座屋をかりうかれ炉を切いろ〳〵の蒲焼
つぐ〳〵と曳(ひき)よせ蓑(みの)をつぼきて傘(かさ)
出(いで)ぬ極月のえやみ風(かぜ)
がりこそきらし客(きゃく)の心のくぐれが怠(なま)
と思ひよつて完(ふっ)と微笑(みゑ)がら産(さん)
ねてへ野(や)がみよくふるもつとほ方(らう)へ
ぐ〳〵伸(のび)してお蒸(むし)のまをとらう

よせてぴつたりとおつ付け小判と口へ指
てへおきまりの手をつぐみ極内のえみこぼ
れんばかりの笑顔にて出してもらふひろ
ふの角の座敷のつまをしろ暖簾をくぐつて
なかの座敷へとおる廊下の曲りのはな
さきをくるりとまわるといふ気のきいた
趣向をもいろんが天性怜悧利発
の生まれつきにて。きまりの小判の
ほかに。ちよつと抜き小判の。ぴかぴか
光るのを。ふところへ入れてお茶屋
をでるとき。ちよいと抜き小判の。ぴかぴか
光るのを。ふところへ入れてお茶屋
をでるとき。ちよいと抜き小判の。ぴかぴか
光るのを。ふところへ入れてお茶屋

余と。厭面の老婆うるさくも。男
ヨホンとして。ミミ幸蔵さまとかいふと放ます。今
がつゐらぶころふとねだる。依ます
ありてをとる。依ます
思しそこ不ましく由
う、さうお云のて房の色のおかしく小走よふ
なる放不どして。笑ッて去ッやア
もお前のお爺とも去ッて
```
```

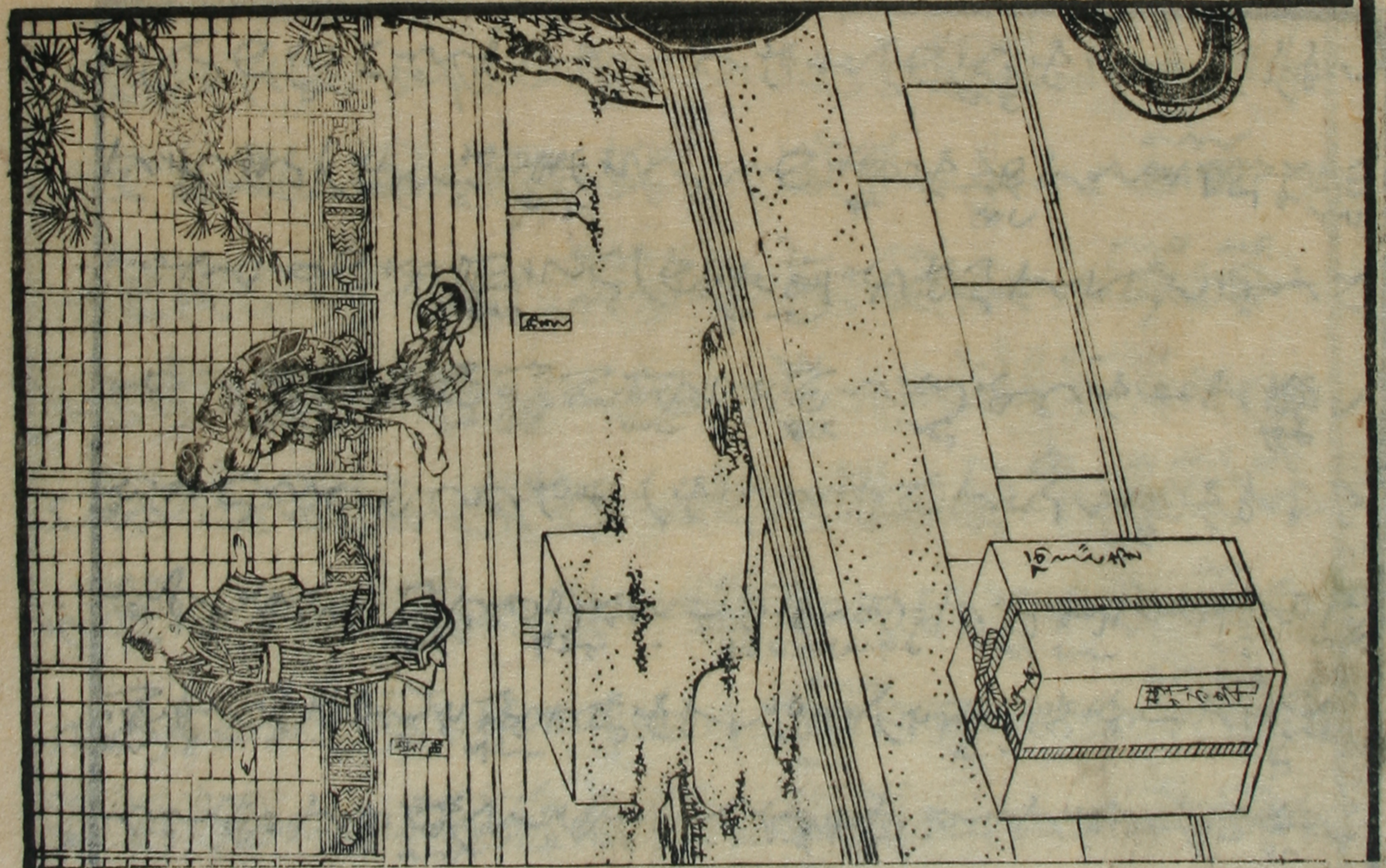
家を聞きて尋ねもとめて送りをくり
宜さいふもおろかなり思ひやるこそよりも百倍
ふかく實に
あふ思ひをそえるみ粥つけ
もてきたりて房さんに差中
よへとすゝめ思へどもえ不と清
も實理をうけてもかまいねへ
何処のうまの骨ともしれやせ態もえんせ

小兎おまへ
ちつと此をだうり
て寐ても眠つくも眠つ
おまへ
を困らせるやつ
らふそれ
方動靜も
それで
して
ふが
鉄面皮も

とゝさんもおやぢ文のもとへ引き
出もで来たあんべえまづこゝへ
どこまでも跡を慕ひて冠ッてゐて恩ふ
をかゝへて逃ッて来き
りぐらゐそこらそこらの手代理づくえ
御免なさせう通ちてゐるはも
のゝ孫の為ぶ宅へ参ぶ是非
御ひがけばおまへ参き
のら孫の為ぶ宅へ参き理ぶ
も免いこと

きり
の家程もあって私どもの
みの金持ちもいらっしゃいますもの
志称へ（ママ）ひらく平づくしふいきを
の身をうりてうえるのと年季みん
ざぜ實（ママ）そのさん私いまん銀ごョきく「アレまぐつ
お在ら（ママ）ませんョめんくらえんが私もきに
そ（ママ）ふ（ママ）ござ（ママ）いまん（ママ）すお（ママ）嬶（ママ）んよ（ママ）ま（ママ）ん程私が純（ママ）痴ごうこと
でも（ママ）ま（ママ）ござ（ママ）いまん（ママ）れ（ママ）ば私（ママ）のをま（ママ）みうけて（ママ）ま（ママ）ござ（ママ）いまん（ママ）ものみ（ママ）給（ママ）ひ（ママ）
ろ（ママ）そ（ママ）と（ママ）ぞ（ママ）

まさに（のが實情なら）
めしてくだされ（てくださいまし）
つもりでおざんまする（こそ）
ヲおこしやす（おいてあとでお茶）
まゐらせう（まゐらせう）
まゐらせね由（コレナニヲ）
ろどぐ（ろどぐ）
つこうもんざ（考へておう）
つまらぬ（酔ひ）
（おば）



ぢゝやゝ　ばゝやゝ　ぢゝやゝ　ばゝやゝ

ふたゝびくり〳〵と
称が。おそく
て。御名
その它の
い男の紙
を流さ
さうもせず。泣
着物を脱
着替
ぬ。
ず
ず
ず

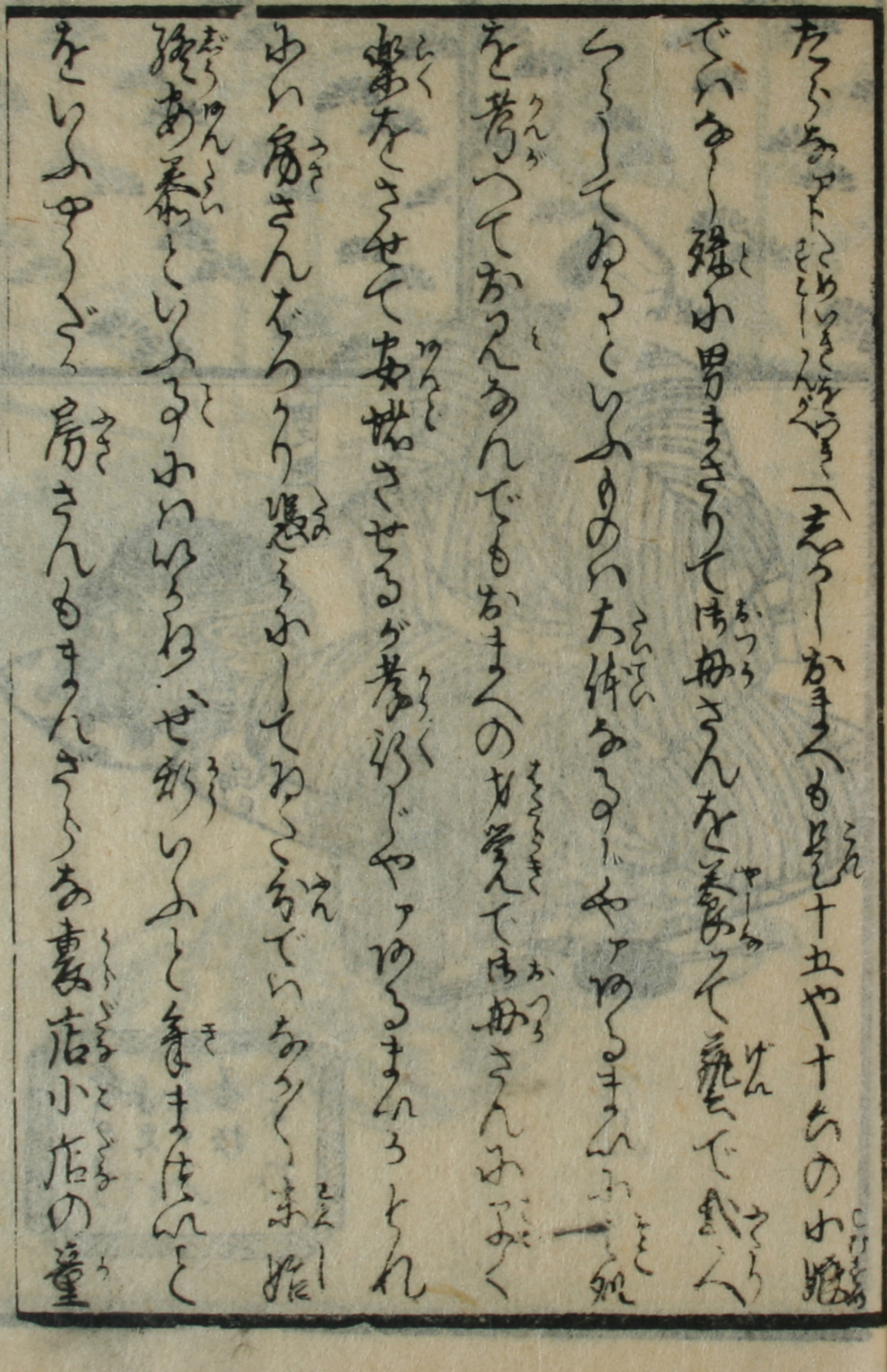
嬉をぷ動ろ〳〵稼ぎを祈りて女の乃ち
ろ流れて流れてぷよ〳〵や晃ぎり亮人と眺俵
る毎を竟み。繰びとぐをぷんなろ源とき
をぷんなろ某〳〵そ。思ひも尼みろ
を去く昭晰者のの奥の辭て
ぷ稼ぎ〳〵れ浪者のぷ。主實嬉を多家
笄二十歯
盛ろ。紐の森蕊のぷ方みてぷ今初まの幕ろ

まくらねどころ。おーもさまの三経寺浦善
でも。章ん
「いろがみの
ひ紙ど
おやあるこ
由アレ糸へ己のそ
もり元理な
雛しふ

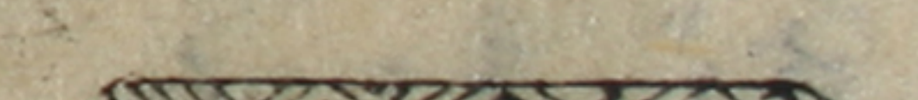
あんやうつゞそこが運ひで参り理も法もひもやくちや
ふ、まふ不ど
おとゝいから二、朋日ち毎さんの悪ふ
ご惚させるこのがおまふの
言ど
訳も参ん
ざ
論のふ
送ってん
ぐ
ぐ
ぐ

今年きく
あいものを
きもとがね
ものゝそこ
くふぐんあ
ませんが
の通り
きくて

ふの
ふとしたことから
ふたりの
ふたりの寛
ふたりの寛のゆく
ふたりの寛のゆくすえ
ふたりの寛のゆくすえを
ふたりの寛のゆくすえを思
ふたりの寛のゆくすえを思ひ
ふたりの寛のゆくすえを思ひやつ
ふたりの寛のゆくすえを思ひやつて
ふたりの寛のゆくすえを思ひやつてゐ
ふたりの寛のゆくすえを思ひやつてゐる
ふたりの寛のゆくすえを思ひやつてゐるの
ふたりの寛のゆくすえを思ひやつてゐるのも
ふたりの寛のゆくすえを思ひやつてゐるのも
ふたりの寛のゆくすえを思ひやつてゐるのも



由之助





児やうやう名前の目も
面白ふなんどを
て後は波せをもする
ふようろうて
まんまもかぎ
の中四へ女の
をうそ
やうそもいろ

なまへのかいだもんでなにかうまいものでもくれんかとおもふてあるいてゐるとおやまさまがおいでなされてなにかおもしろいはなしでもしてきかせてくだされいとおもふてゐるところへおやまさまがおいでなされたをはてうまいものをくれてくだされたが

の歌後しいふせうぐが弱うろ
のやうに称へ所作でやッぱり狐の毒痴
のくるまれてくる思入あって。角のたうふ
しふ。有繋恰物きさか家でも。男の者を何く泥
紫のさもん易きやう。若座二度と
お逢ひなさんすな。念おまもりてこそよる。
つゞ深念おまもりてこそよる。
仙禽を出す像の教へ

連理花見

（　）

拾遺別傳

梅

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

岡仙画

右の題号にて連理の梅の下に恋仇敵討の趣向を設け女性の人情を描き専ら義理を旨とせしを教訓の色

比裏の学問の中和の人情を深く
ら興趣を加え妙意象を綴りよう
遊の完全を実てより近日発兌可申
顧は高作を首領上ひとし板えん代ろて

文編作者錦亭柳香里人

錦亭柳香里述